荒れる若者とハロウィーン

佐々木　隆

プロローグ

筆者は『ポップカルチャー・若者文化研究』（第1号、2019年2月）において、「日本のハロウィン今昔物語：明治時代に紹介されたハロウィン」を発表して、すでに書物の中でハロウィーンが紹介されていることを紹介した。もちろん、これは日本で行われたハロウィーンではなく、田村哲（1876-1909）が留学中に見聞したアメリカのハロウィーンの様子で、留学中の内容をまとめた『外遊九年』（目黒書店、1908年11月）の中で紹介されたものだ。その中の「二〇　ハロウィーンの奇習　男女学生の社交機関」の内容から若者の行動に注目しながら、ハロウィーンにおける若者の行動について考察していきたい。2018年の渋谷では軽トラックが横転させられ逮捕者まで出る騒ぎになり、日本のハロウィーンがまるで荒れたハロウィーンとして報道された。本稿ではこの「荒れたハロウィーン」が異常なものなのかを含めて、「荒れる若者とハロウィーン」に焦点を当てて考察するものである。

1　ハロウィーンの原点

ハロウィーン（Halloween）は元来ドルイド教のサムハイン(Samhain)としての宗教行事が、キリスト教の中に取り込まれ、その名称も11月1日の万聖節（All Hallows' Day, All Saints' Day）の前夜祭として、All Hallows' Even に由来し、ハロウィーンとなった。(1)

サムハインにはドルイド教の中心的な考えである「太陽崇拝」「自然崇拝」「生命の輪廻転生」「霊魂の不滅」がある。(2) このためサムヘインには２つの祝祭の意味がある。もちろん太陽を崇拝する、信仰の対象にする宗教はドルイド教に限られるわけではない。日本、エジプト、ギリシャ、古代ローマでも存在していた。Lisa Morton. *The Halloween Encyclopedia* (2003)も次のように述べている。

> Halloween is largely a combination of two celebrations: As a HARVEST festival, it is similar to the American THANKSGIVING and the European MARTINMAS (which is celebrated on the day onced belonging to Halloween, November 11); and as a commoration of the dead, it may have roots in the EGYPTIAN FEAST OF THE DEAD (which mourned the passing of the sun god Osiris), the Greek ANTHESTERIA, and the Roman festivals of both FERALIA and LEMURIA. (3)

収穫祭と死者の魂が現世に戻る２つの祝祭の意味がある。とりわけ、祝祭につきものが「酒」であり、そこは宴会やエンターテイメント等が行われていたことは想像のつくところだ。Lisa Morton. *trick or treat: a history of Halloween* (2012)でも次のように述べている。

Some archaeological evidence suggests that Samhain may have been the only teime when the Celts had ready access to an abundance of alcohol, and the surviving accounts of the festival—in which drunkenness always seems to occur—support this as well. (4)

お酒、アルコールが入ればそれは神聖な静粛なものから、開放的なものへと変貌したことだろう。ハロウィーンにお決まりの仮装と trick or treat についてもその原点はサムヘインにみることができる。仮装については 10 月 31 日の夜は死者の魂が現世に戻ってくるとされているが、戻ってくる魂はなにも身内や良い人のものばかりではない。こうしたことから良からぬ魂、悪魔や悪霊にひどい目に合わないようにするために、死者の世界にいる者の姿に似せた仮装をすることで災難を避けようとすることから仮装(mumming)がおこなれた。「トリック・オア・トリート」(trick or treat) の原点は「ソウリング」(Souling)と呼ばれている風習がある。藤高邦宏「万聖節の前夜祭 Halloween (Hallowe'en) 10 月 31 日」では次のように説明している。

かつてケルト民族は 11 月 1 日に新年を迎えると、彼らはそれを「冬の始まり」とした。彼らは、サムハイン Samhain の祭りを祝ったが、その前夜にあたる「冬の前夜」'Winter's Eve' と、新しい年の元日を祝う習慣があった。つまり 10 月 31 日の夜は、ケルト民族にとっては 1 年の分岐点にあたっていた。この分岐点の日には、死者たちの霊が生家に戻り、夜通しその周囲を徘徊し、また同時に、超自然のあらゆる種類の聖霊が、特にこの夜には恐るべき魔力を発揮して人里に群がり、人々に危害を加えるものと信じられていた。

キリスト教会は、この異教の祭りにキリスト教的意味づけをし、また信徒たちを保護する目的で 11 月 1 日を万聖節 Feast of All Saints (or All Hallows と定めて諸聖人の霊を祀り、その翌日の 11 月 2 日を万霊節 All Souls' Day として、すべての死者たちに対して祈りを捧げる日と定めた。Hallows (or Saints)とは聖徒の意味である。ハロウィーン Halloween とは、11 月 1 日の万聖節 All Hallows (or Saints)の前夜の祭りをさす。

万聖節の前夜祭 All Hallows' Even、つまりハロウィーン Halloween には、かつては生家に戻ってくる死者の霊のためにさまざまな行事が行われていたとされるが、今日ではソウル・ケーキや小銭の喜捨を求めながら個別訪問するソウリング Souling の風習がわずかに残っている他はほとんど廃されてしまった。イギリスの北部地方や西部地方の各地には、子供たちが悪魔や悪霊を演じて思い思いの変装をして、ちょうちんをさげ、隊を組んで街を練り歩きながら軒並みにドアを叩き、キャンディーや小銭をねだる風習がある。(5)

Lesley Pratt Brannatyne. *Halloween: An American Holiday, an American History* (1990)でも次のような説明がある。

The custom of begging for food from house to house on Halloween came from the Old Catholic soul-cake custom. Once charitable in nature, "souling" took a popluar turn as it evolved over the years. Irish Halloween begging always involved a masquerade and some sort of good-natured bribe, but who did the begging and what they were after varied from region to region.

In Ireland's Country Cork, a mummer's procession marked All Hallows. It was composed of young men, self-proclaimed ambassadors of Muck Ólla (a boar known in Irish folk tales). The leader (Láir Bhán－or white mare) wore white robes and horse's head; the rest of the procession fell noisily behind, blowing cows' horns to announce themselves at each new house. Prosperity was promised to those who gave food, drink or money to the revelers. (6)

サムヘインでも、夜に仮装してソウリングと言われる家々を巡る行動が行われており、これがハロウィーンにも引き継がれたとしても何ら不思議ではない。

2　海外の様子　ガイ・フォークス・デーとミスチフ・ナイト

ハロウィーンの悪ふざけや騒々しさを取り上げるためには、ガイ・フォークス・デーを取り上げる必要がある。日本でも世界史の教科書には「火薬陰謀事件」(Gunpowder Plot) として掲載されている。エリザベス一世（1533 - 1603）崩御後、スコットランドとイングランドの両方を治めることになったジェームズ一世（1566- 1625）に対して、カトリック教徒の間で不満がたまり、1605 年 11 月 5 日に国王暗殺を目的にウエストミンスター宮殿（国会議事堂）を爆破しようとしたが、この爆破計画は前日に露見し、ガイ・フォークス一味が逮捕された。これを記念した祝祭がガイ・フォークス・デー（Guy Fawkes Day）である。10 月 31 日のハロウィーンよりもこの 11 月 5 日のガイ・フォークス・デーの方がイギリスでは盛んであるという。(7) この日には篝火がたかれ、花火も打ち上げられることから、ガイ・フォークス・ナイト(Guy Fawkes Night)、あるいはボンファイアー・ナイト(Bonfire Night)とも呼ばれる。11 月 5 日の準備をするためその前夜はミスチフ・ナイト（Mischief Night）と呼ばれ、アメリカではデビルズ・ナイト(Devil's Night)と呼ばれている。(8) 若者はこうした行事とどのように関わったのであうか。Rogers, Nicholas. *Halloween: From Pagan Ritual to Party Night* (2002)の中でも宗教的な意味が薄れる中で、別の意味で若者が集まる口実を与えることにつながったという。

The conventions of misrule gave young males a prescribed role in Halloween, although it was clearly open to abuse. It was their job to solicit peat and collect wood and fern for the bonfires. In Skye it was reported that they exercised "greta licence, taking barrels, even doors, wheelbarrows and carts" for the communal bonfire, presumably with some reckoning of what each household should contribute. Here,

and in the guising and mischief that accompanied the night, male youths were clearly the dispensers of rough justice in their communities and their unofficial spokesmen.

Although young women were sometimes masked on Halloween, the holiday was indisputably an important occasion for male bonding among revelers. The activities that took place within and near the home, however, tended to focus upon the aspirations of young women. Apart from the games such as apple-bobbing that were played on Halloween by all members of the family, Halloween acquired a special significance as a courtship ritual or augury for marriage. (9)

行事等では若者をいかに取り込むかは継続性の観点からみても無視できない。娯楽の少ない時代では特にこうした問題は今以上に切実であったであろうことは想像がつくところだ。ハロウィーンの占いもまた、若者を取り込むためのひとつの方法であったことは想像のつくところだ。関口英里「エンターテイメントとしての祝祭空間—ハロウィン分析をと通して見るアメリカ社会」(2003) も次のように指摘している。

ハロウィンは、若者や大人も参加する一大イベントへと変化、発展している。一方で、近年は度を超した若者のお祭り騒ぎによる事故や、犯罪の多発という新たな問題が発生している点も見逃せない。現代、特に都市部の若者は、ハロウィン行事の範疇を逸脱した悪ふざけ的なお祭り騒ぎに興じる傾向が強まっている。これを、ハロウィンと「ミスチフ・ナイト」(Mischif Night) の相乗効果として捉える見解もある。

アメリカにおいて、ハロウィン前夜の 10 月 30 日は「ミスチフ・ナイト」として知られている。「ミスチフ・ナイト」とは、イギリスにおいて古い歴史を有し、当初 4 月 30 日に行われていたが、19 世紀ごろから 11 月 4 日、つまり「ガイ・フォークス・デイ」の前夜に行われる行事となる。これがアメリカに紹介された後、アメリカではハロウィンの前夜祭として認識されるようになった。「ミスチフ・ナイト」では、子供のみならず若者がおもに子供の行事となっている一方で、「ミスチフ・ナイト」は古くから若者の行事とみなされる傾向が強かった。また、アメリカの中西部やインディアナ州などではハロウィン自体を「ミスチフ・ナイト」と呼んでいる場合もあり、若者にとってのハロウィン行事と「ミスチフ・ナイト」の悪ふざけとは、殆ど一体化したものといえるだろう。

このような理由から、ハロウィン前夜から当日にかけて、若者達による派手な逸脱行為が多発しているのである。(10)

インターネットの記事にも気になるものがある。Brandi Neal "What Is Devil's Night? The History Of The Night Before Halloween Goes A Long Way Back" (Oct. 29, 2017)には次のようなことが紹介されている。

Some pranks were indeed harmless, but others had lasting, devastating effects for communities. Mischief Night began to gain visibility in the 1930s and '40s because

the "tricks" started to make headlines in the U.S. "In 1934, in Connecticut, a 14-year old boy was beaten to death at a Halloween party; same year, an 8-year old Chicago boy, watching a bonfire of stolen gates, was killed by trick-or-treaters. As late as 1964, trick-or-treaters trashed the New York studio of artist Andrew Wyeth," the *Chicago Tribune* reported. (11)

アメリカではミシガン州デトロイトでは1984年には297件のデビルズナイト火災(12)があった。

イギリスではハロウィーンとガイ・フォークス・ナイトやその前日のミスチフ・ナイトの混乱はない。むしろガイ・フォークス・ナイトはアメリカに入ると、これがハロウィーンと勘違いされることさえあった。サムヘインやハロウィーンで行なわれていたソウリングやトリック・オア・トリートはミスチフ・ナイトでも行われていた。アメリカでは混乱ぶりについては Robert J. Meyers. *Celebrations: The Complete Book of American Holidays* (1972)によれば、trick or treat と関連して次のように述べている。

As for "trick" part of the trick-or-treat custom, it stems from the many years in this country when the night before Halloween was known as "Mischief Night." In some places the antics of this night were carried out on Halloween. Gates were unhinged and hidden, ropes stretched across roads in the dark, outhouses toppled, doorbells rung, bags of powder spilled on porches, and in general whatever mischief could be thought of was done.

The basis for Mischief Night is the old belief in ghosts and fairies who roamed the roads on Halloween night curding milk and riding people's horses to exhaustion. Any practical joke could thus be blamed on these little creatures over whom no one had any cotrol.

In recent years, under the auspices of UNICEF, youngsters and adults have gone from door to door collecting funds for the poor children of the world rather than treats for themselves. The practice is not yet widespread, bu has been growing with the general social consciousness in many communities. (13)

アメリカでは18世紀末にはこのガイ・フォークス・デーは祝わることがなくなり、その代わりボンファイアーは選挙投票日 (Election Day)、すなわち11月第一月曜日の翌日である。Jack Sanito. *New Old-Fashioned Ways: Holidays and Popular Culture* (1996) (14) や Jack Sanito. *All Around the Year: Holidays and Celebrations in American Life* (1995) でも言及されているのだ。(15)

3　「二〇　ハロウィーンの奇習　男女学生の社交機関」

田村哲『外遊九年』（目黒書店、1908 年 11 月）の中で紹介されたのが「二〇　ハロウィーンの奇習　男女学生の社交機関」である。

幾百年前から言ひ伝へて居ることか知れないが、毎年の十一月一日を以て諸神の日即ち All saints day として置くのだ。昔は特別な祭典でも行つたものだらうが、基督教が伝播した今日では勿論そんなことは行なはない。其の前夜即ち十月三十一日の夜をハロウィーン Hallowe'en 或いは Halloweven と称する、一説に此のハロウィーンと云ふ語は Hallow Eve といふ語から転化したともある。それで此の夜は、鬼神妖怪の類が到る處に横行して悪戯を演ずる晩だと傳へられてる、蘇国の百姓詩人として知られたロバート、バーンズの詩中にも種々のハロウィーン怪談が載せてある。米国の田舎に於ては、十月三十一日の夜が来ると、柵が倒れて居たり、大きな材木が道路の眞中に横つて居つたり、こちらの家の荷車は隣家の屋敷にあつたりする。勿論文明国に鬼神妖怪などの出る筈はないが、如何に開化した国でも悪戯小僧は居る、こゝに悪戯小僧というても悪少年のことを云うて居るのではない。ハロウィーンには此の小僧等が出て悪戯をするのだ、男女学生等の間にも種々の喜戯を演ずる。若い女などが其の晩外出るすると、男に頬を撫でられたりことがある、勿論それ以下の悪戯はない、又女が大勢男装して道路をあるいて居ることもある。ハロウィーンの晩丈けは道徳上の罪とならぬ限り、社会も法律も大目に見て許して置くのである。(16)

この田村の記述は 19 世紀末から 20 世紀のアメリカのハロウィーンの様子と捉えることができる。このパラグラフから読み取れることは次の 5 点になろう。

1　11 月 31 日の All Saint's Day の前夜、10 月 31 日をハロウィーンと呼ぶ。Hallowe'en 或いは Halloweven と称すること、また、Hallow Eve といふ語から転じたものかもしれないことを紹介。
2　10 月 31 日の夜は鬼神妖怪の類が至る所に横行して悪戯をすること。
3　スコットランドの詩人ロバート・バーンズの詩の中にもハロウィーンが取り上げられていること。
4　男女学生（若者）はハロウィーンでは皆悪戯をし、女が男装していることがあること。
5　ハロウィーンの晩は道徳上に罪にならなければ、社会も法律も大目に見てくれること。(17)

特に第 5 点については注目に値する。これは田舎ではとあるため、これが大都会で生じた場合には許容範囲からは外れる可能性がたかい。ここではガイ・フォークス・デーやミスチフ・ナイトの記述はないが、若者の騒ぐ行事になっていることは確かである。

4　若者とハロウィーン

アメリカにハロウィーンが伝わった時には同時にガイ・フォークス・ディ、ガイ・フォークス・ナイト、ミスチフ・ナイトなどが伝わり、1870年代には若者による騒々しい祝祭となり、1930年代になるとトリック・オア・トリートが荒れた形になり、ゆすりかたりなどにも結びいてしまった状態もあったという。(18) 1930年代の様子として、ショーン・ホーリー／川村雅也他訳『アメリカ・ポップカルチャー事典』(1997) では以下の示している。

> 10月31日の晩に行われる年中行事。アメリカとイギリスでは、子供たちが、お面を付けたり仮装したりして、「お菓子をくれなきゃ、いたずらだ」と言いつつ、お菓子、果物、お小遣いをねだり、近所の家々を回る（⇒パンプキン）。この「お菓子くれなきゃ」の習慣は、1930年代に、青少年の暴力行為を抑制する手段として生まれたものである。(19)

一方で、ハロウィーンのトリック・オア・トリートは子供の息抜きとしての役割もあったのではないかとの見方もある。(20) 日本ではハロウィーンがまだ定着する以前のことであるが1992年10月17日にショッキングな事件もあった。

> アメリカ・ルイジアナ州の日本人留学生がハロウィンパーティへ出掛けたが訪問先を間違い、仮装していた。訪問先の家では不信感をもち、“Freeze”（動くな）と警告したが、静止を聴かなったため、銃で撃たれ死亡した事件。(21)

ここではアメリカでもすでにハロウィーンが10月31日の2週間前にも大学生がハロウィーンパーティが行われていたこと、仮装などもしていたことが分かる。この事件ではFreezeが理解できなかったことや銃規制問題が取り上げられた。ハロウィーンとミスチフ・ナイトでは小さな子供にはソウリングやトリック・オア・トリート、そして若者になってくると夜に徘徊できることから、騒動が起きるのは昔も今も変わりない。

日本では特に2018年10月に渋谷センター街のトラック横転事件に代表されるような暴動や犯罪紛いの行動から逮捕者が出るまで過度な盛り上げりが報じられた。渋谷という大都会の街中で起きたことがニュースとなった。しかし、これまで見てきたように、アメリカのデビルズ・ナイト、ガイ・フォークス・ナイト、ハロウィーンでは死亡者が出るような騒動もあった。日本ではそこまで悪化してないが、だかと言って安心できるわけではない。

5　日本の若者とハロウィーン

若者を具体的に定義するのは難しい。いわゆる法令等では「少年、青少年、児童、子ども」などの呼称はあっても、「若者」は使用されていない。若者に関する定義らしきものをリサーチすると以下のような結果が得られた。

人口統計学辞書

子供時代の後は、思春期（620-2）に始まる思春期[1]または青年期[1]が続く。青年[2]または若者[3]という用語は、子供時代と成年[4]の間の男女を指して使われる。成熟期[4]に達したものは成人[5]と呼ばれる。老年[6]は大部分の人が引退した人生の時期を定義するのに用いられる。この年齢以上の人々は老人[8]、高齢者[8]、老年者[8]と呼ばれる。

1. 若者 youth という語を集合的に用いることもある。単数で用いる場合は、男性を意味することが多い。アメリカ合衆国では、ティーンエージャーteenager は teen のつく十代、すなわち 13 歳から 19 歳の人を指す。

2. 成人 maturity（名）；成人の mature（形）；成熟 maturation（名）：成人に達する過程。(22)

厚生労働省「若年者雇用対策」

働くことについてさまざまな悩みを抱えている 15 歳～39 歳までの若者の就労を支援しています。(23)

国際連合広報センター

総会は 15 歳から 24 歳までの人々と定義される若者 (24)

『令和元年版　子供・若者白書』

内閣府では、我が国と諸外国の若者の意識を比較することにより、我が国の若者の意識の特徴及び問 題等を把握し、子供・若者の育成支援に関する施策の参考とするため、平成 30（2018）年度に「我が 国と諸外国の若者の意識に関する調査」[1]（平成 30 年 11 月及び 12 月に日本を含めた 7 か国の満 13 歳から満 29 歳までの男女を対象に実施したインターネット調査。図表 1）を実施した。(25)

若者をどうとらえるかは様々であるが、労働力として若者を見た場合には厚労省では 39 歳までを若者としている以外は、概ね 13 歳から 29 歳といったところが若者であろうか。日本のハロウィーン、特に渋谷のハロウィーンに注目してみると、いわゆる「若者」と称される年齢層がハロウィーン当日やその直前の週末には自然発生的に渋谷センター街に集まって来るのが大きな特徴だ。

日本のハロウィーンには欧米とは異なり、宗教的な背景や移民の影響はない。日本のハロウィーンのおもな受容・変容の流れはおもに 5 つに整理できる。(26)

1 年中行事として日本にいる外国人によって実施され、周辺の日本人もこに参加した。
2 商店、企業等がおもにお菓子の販売促進を行った。
　→1976 年のモロゾフのハロウィーン商戦がその先駆。
3 商店、企業等が仮装パレードを開催し、集客に務めた。

→1983 年のキディランドからはじまり、1997 年の東京ディズニーランド がその代表。

→1997 年から始まったカワサキハロウィンもともとはラチッタデッラが中心となり商業振興を目的としたイベントであった。(27) 今では「1997 年、まだ日本に『ハロウィン』がほとんど馴染みのなかった頃、川崎の街の元気と魅力を全国に向け発信することを主目的に、地元のエンターテイメント企業“チッタ”がスタートさせました！」(28) とあるよ うに地域活性化の意味合いが強く加わったものもある。なお、商店街・地域活性化のための商業戦略となっている場合もある。(29)

4 ホラー映画・ゾンビ映画がハロウィーンの「怖い」イメージと合い、若者に受け入れられた。(30)

5 若者が自然発生的にある特定の場所に集まり、コスプレをして大騒ぎをする。

→ 昨今の渋谷などがその代表。上記 3・4 が発展したもの。

上記５にはいくつかの要因がある。

要因１　若者が自然発生的に集まる。
要因２　集まる場所は特定の場所。ここでは渋谷を例とする。
要因３　コスプレをする。
要因４　大騒ぎをする。

渋谷のハロウィーンを考えるためにはこの 4 つの要因を考えることが必要であろう。

まず要因１「若者が自然発生的に集まる」については「若者」と「自然発生的に集まる」という２つの内容がある。日本の外来の行事としてよく取り上げられるのはクリスマスとバレンタイン・デーである。これらの行事も若者に人気の高いところだ。しかし内容的に大きく異なるところがある。クリスマスは家族、恋人同士、友人が共に集って楽しむ行事という心象が強い。バレンタイン・デーは恋人同士のイベントである。両者に共通するのは贈り物であろうか。これに対してハロウィーンは家族、恋人同士というよりは友人が共に集まって楽しむことになろうか。特に男女は関係ない。しかも最も気を遣う贈り物などもない。その代わりにコスプレ（仮装）がある。渋谷のハロウィーンのもうひとつの大きな特徴は誰が号令をかけるでもなく、10 月 31 日の夜を中心に渋谷に若者が集まってくることだ。渋谷にやって来る人はおもに２つのタイプがあるだろう。第１のタイプは友人や特定のグループなどで渋谷で待ち合わせてから、時間になるとセンター街へ移動する。第２のタイプはひとりで渋谷に来て、時間になるとセンター街へ移動する。この日に合わせて準備してくる場合もあれば、たまたま学校や仕事帰りに寄ってみる場合、さらには特に予定はしていなかったが、前日や当日になって急に行ってみようという場合もあるかもしれない。

要因２「集まる場所は特定の場所。ここでは渋谷を例とする」を解明するのは最も困難だろう。なぜ渋谷に集まるのかについては以前筆者がまとめたものがあるので、それを紹

介しておきたい。その原因と思えるものを9点あげた。

1　もともと渋谷は若者の街としてファッションや流行のものが集まっていた。
2　2002年の日韓ワールドでスクランブル交差点でのハイタッチ・ムーブメントが行われ、その後もワールドカップでの日本代表の活躍にリンクして断続的に行われていた。
3　2015年、2016年と渋谷区などの行政側も加わり、スクランブル交差点でカウントダ
ウンイベントが開催された。
4　ハロウィン市場規模拡大が2015年に訪れ、同じ時期にスクランブル交差点でのカウントダウンイベントが開催されたことに触発され、まずは渋谷に集結し始めた。
5　スクランブル交差点、道玄坂、文化村通りは道幅もひろく、交通量も多い。また、道玄坂は路線バスの経路になっている。このため、渋谷駅前の待ち合わせ、その後、センター街への移動という流れが出来上がった。
6　センター街やその周辺には東急ハンズ、西武のロフト、ドン・キホーテをはじめ、いわゆるハロウィングッズを大量に扱う店がある。
7　マスコミに報道もあるが、SNSを通して渋谷に行けば何か楽しいことがある、また、インスタ映えする写真が撮れると期待して、とりあえず渋谷に言ってみる。2016年8月のリオオリンピックの閉会式では日本のへの引継ぎセレモニーの映像は実質的には渋谷のスクランブル交差点から始まっている。
8　日常ではあり得ない、非日常化（劇場効果）を体験してみたいという気持ちから友だちと渋谷に行ってみようという気持ちが生じる。
9　外国人もインターネットを通して渋谷スクランブル交差点の存在を知り、さらに海外の映画では『ロスト・イン・トランスレーション』(2003)、『ワイルド・スピードX3 TOKYO DRIFT』(2006)、『バイオハザードIV アフターライフ』(2010) が渋谷も舞台となっている。(31)

「大人は眉をひそめる『ハロウィン』バカ騒ぎをどうしてくれよう！」(『週刊新潮』第60巻第42号、2015年10月）では次のような記事が掲載されている。

それにしても、日本でなぜこれほどハロウィン人気が急伸し、根付いたのか。

「要因の一つに、SNS効果が挙げられます。加えて、メディアの力もある。様々な形で取り上げるので、社会での認知度は急速に高まった」(先の加瀬氏)

メディアでもとりわけテレビの力が大きいようだ。テレビ局幹部が言うには、「確かにハロウィンの仮装は画（絵）的にも魅力的で、テレビ向きのコンテンツです。大勢の人が集まるから、そこには自ずとお金も動く。するとスポンサー企業が関心を持たないはずがない。つまりハロウィンは、イベントを楽しむ参加者。スポンサー、テレビ局、いずれにとってもおいしいお祭りなのです。日テレは「ハロウィン・ライブ」を日本武道館で開催するし、フジやTBSもイベントを催します」テレビの力もでさらに“1億総ハロ

ウィン化“の様相を呈するようになるのか。[32]

（先の加瀬氏）とは日本記念日協会の加瀬清志代表理事のことである。

要因３「コスプレをする」についてはコミケ等でも本格的なコスプレイヤーの登場もあるが、もっと気軽にコスプレしたいと思っている人が案外多いというのもハロウィーンを見れば一目瞭然である。以前は「コスプレする人」＝「オタク的な人」と言った印象を持つ人も少なくなかったはずだ。しかし、実際には自分はできないが、見てみたいという観客意識の人も多いということだ。これはSNSなどによる投稿も多くあり、マンガ・アニメ好きの人やファッション感覚でこれを見て楽しむ人などが以前によりも多くなったからだろう。よく言われるオタクのライト化、あるいはオタクが庶民化した、あるいは一般庶民がすでにオタク化し、コアなオタク以外はみなオタク要素を持ち合わせていることになるだろうか。よく言われるオタク第１世代が親の世代となっていることから、第２世代、第３世代がインターネットの登場、SNS の登場により、コスプレに対する偏見が薄らいだこと、またコスプレするのに容易な環境が整ったことが大きな理由かもしれない。

コスプレには一種の変身願望もあり、非日常化を助長させる大きな役割があるため、ハロウィーンをさらに楽しむために変身願望と融合して、個人でのコスプレやグループでのコスプレなどもある。コスプレをして参加する場合もあれば、コスプレはしないがこれを見たいという観客意識も働くかもしれない。

要因４「大騒ぎをする」は非日常化の大きな側面かもしれない。日常生活にストレスが多ければ多いほど、その反動は大きいものとなるだろう。「大騒ぎ」を助長するものとしては４つのものが想定される。第１にコスプレである。変身願望が実現し、コスプレの内容によって個人が特定でない場合があり、匿名性があること。第２に自分が普段生活しているエリアでないところでは、非常識な行動をとりやすいということもあるだろう。身内や知り合いと合わないことから、破目を外しやすいという傾向もあろう。第３に群衆心理である。第４はアルコール、飲酒の問題である。日本の場合には年齢制限以外、飲酒することについて国レベルの法律はない。しかし、飲酒運転をはじめ、飲酒がらみの事件・事故は後をたたない。飲酒を健康面[33]や犯罪がらみからとらえようとするなどもあるが、ここでは公共の場での飲酒というのが問題である。[34]よく比較して例に挙げられるのが、アメリカの飲酒に関する考え方である。かつては禁酒法迄定めたことのあるアメリカでは、現在でも飲酒年齢に加えて、飲酒できる場所についての制限が州ごとに定められている。アメリカではホームパーティが盛んであり、庭先で当然ながら飲酒もする。この時の取り扱いやトラブルがあった時の責任の所在も定められているようだ。飲酒した本人よりもパーティを主催したもの（飲用アルコールを提供したもの）が責任を負うようである。このため公共の場で飲酒しながらのクリスマスパーティ、カウントダウンなどはできないことになる。これに対して日本の場合には法令上はこうした縛りはなく、自制心と周囲からの容認により、春の花見などから始まり、野外での飲酒は慣例的行われている。

2018年の渋谷のハロウィーンを振り返りながら日本のハロウィーンについてまとめた松井剛編『ジャパニーズハロウィン―若者はなぜ渋谷だけで馬鹿騒ぎするのか？』（星雲社、

2019年9月）がある。この本は一橋大学商学部松井ゼミ15期生が取材したもとにまとめたものだ。渋谷センター商店街振興会組合理事長の小野寿幸、渋谷区役所広報コミュニケーション課長・杉山省吾への取材などが含まれていることは興味のあるところだ。この中で渋谷ハロウィーンに来る人を2つに大別している。

> ここで重要なのは、仮装してハロウィンを楽しむ人と、仮装などせずにハロウィンに乗じて騒ぎたいだけの人、という2つのセグメントを分けて考えなければならい、ということだ。後者は、0時を過ぎてからセンター街で酔っ払って喧嘩をするような人々である。(35)

「大騒ぎをする」の背景に飲酒を考えると、自制ある行動はとりにくい状態である。しかし、この飲酒をどう規制するかが一つの鍵になりそうである。ただ厄介なことは渋谷センター街での飲酒を禁止しても、すでに他の場所で飲酒してから来たのではこれを規制することはできないということだ。センター街を時間制限して出入りに制限を掛けるとなれば、センター街全体がどう判断するかの大きな決断が必要になるだろう。

6　2018年の渋谷のハロウィーンを考えてみる

筆者は2018年の渋谷のハロウィーンの時期にテレビ局への出演と新聞へコメントを寄せるなど、マスコミで発言を行った。

「羽鳥慎一モーニングバード　渋谷ハロウィーン狂想曲の波紋」に出演、コメント（テレビ朝日、2018年10月30日）
「主催者なし、ステージのような魔力　渋谷ハロウィーン　マナー守って」（『東京新聞』2018年10月31日朝刊第22面にコメントあり）
「ＮＳスタ　ハロウィーン　なぜ渋谷がこんな事に？」に出演、コメント（ＴＢＳ、2018年11月1日）

「モーニングバード」では渋谷ハロウィンの大きな特徴として、主催者がいないこと、長期化を主に取り上げた。1997年より主催者がハロウィンを地域のイベントに成功した事例として、カワサキハロウィンを紹介した。

『東京新聞』では仮装の焦点を絞り、「仮装しているので、普段より思い切った行動をとりやすい。そこに集団心理も相まって、突飛な行動に走る人も出てくるので」(36)、人の流れととして「鉄道の相互乗り入れの影響で、渋谷の地盤沈下も懸念されており、規制は避けたいだろうが、このままいけば大変なことになる」(37)とコメントした。ここで表現されている「地盤沈下」とは文字通り意味ではない。渋谷がこれまで乗り換えにより滞留していたが、乗り換えなし新宿、池袋に移動できるだけ、人の流れが大きく変わり、渋谷への人出が激減する懸念があるとの意味である。しかも、駅ビルでなく、特に渋谷センター

街を指しての内容である。

「ＮＳスタ」では2002年の日韓ワールドカップ以来、渋谷スクランブル交差点でハイタッチムーブメントなどが起きた際に、大きな規制をすることなく、推移したため若者はこれが容認されたため、さらに激化の一途を辿ったこと、マスコミ報道により渋谷の関心を反対に喚起してしまったことを取り上げた。しかし助長された行動は、もはやモラルの問題を超えて、犯罪に発展している、規制の必要性を訴えた。最終的には「容認と規制」のバランスとしてまとめた。

この渋谷ハロウィーンの騒動を思う時、「荒れる成人式」と似ているような印象を持つ。しかし、「荒れる成人式」は主催者、おもに地方公共団体であるが、式典の見直し、警備等の強化などにより落ち着きを取り戻しつつある。(38) どちらの騒動もそれを引き起こしているのはごくごく一部の人である。成人式では主催者がいるため、主催者側の努力が実を結んだと言える。

2018年のハロウィーンで印象的であったものを2つ挙げるとすれば、第1に軽トラックの横転事件、第2に変態仮装行列だろう。特に後者の渋谷センター商店街振興会組合理事長の小野寿幸の言葉である。渋谷ハロウィーンと渋谷センター商店街振興会組合については筆者自身が他で論じているため、ここでは詳細は省くこととする。(39)

筆者が渋谷ハロウィーンに関して多大な被害や受けているセンター街や渋谷区のコメントで気になるが、「騒いでいる外から来ている人で、ハロウィーン当日などは売り上げが下がるから商売にならないから来てほしくない」と言った趣旨のものだ。被害を受けている者としてのコメントであるが、単純に同情はできない。なぜなら、センター街をはじめ渋谷という街は、渋谷以外の若者を中心とした人が集まり、ファッションやエンターテイメント、飲食等にお金を落として来たからだ。渋谷を発展させた人も渋谷を混乱に落としているのもおそらくは渋谷以外の人たちということ忘れてはならないだろう。

筆者は「容認と規制」のバランスが最も気になるところであるが、いわゆる自然発生的誕生した渋谷ハロウィーンの最大の問題は、主催者がいないため規制がかけられないこと集まってきた一部の若者に自制心やモラル感の欠如が目立ってきたことだ。

渋谷センター商店街は渋谷駅の近くにあること、地下道からすぐに出られること、バス通りでないこと、時間帯により自動車が入れないこと、この周辺にはメガドンキー、東急ハンズ、西武ロフトなどがあることも若者を惹きつけている要因ではないかと思える。原宿の竹下通りにも似たような傾向がある。渋谷は若者の街として定着し、2002年の日韓ワールドカップのスクランブル交差点でのハイタッチムーブメント(40)がすべての起点であったように思えるのだ。以降、この若者の行動は「容認」されたからだ。日本は概して、規制することに躊躇い、対策が遅れることが多い。このことは昨今の新型コロナウィルス感染症（COVID-19）における緊急事態宣言をはじめ、不要不急の外出禁止、県外への移動自粛などを見れば明らかだ。日本は法律による規制ではなく、人に迷惑をかけないという日本人の強い意識に頼っての対策が主である。おそらく渋谷ハロウィーンについてもこの「人に迷惑をかけない日本人の強い意識」に頼っていたことと、強い規制をかけることで、行政が苦情や抗議を言われることに対して強い嫌悪感を持っていることが実は大きな原因

ではなかったとも思えるのだ。この背後にマスコミの報道の論調が大きく影響していることは言うまでもないことが。2002年の日韓ワールドカップにはじまり、渋谷スクランブル交差点でのハイタッチムーブメントを容認してきたことが過熱を高め、さらに若者を渋谷へ集めてしまった大きな要因ではなかったのではないだろうか。

強い規制をかければ集まって来る若者を中心にしたものからの苦情・抗議、マスコミからの攻撃も予想のつくところだ。しかし、現在の2018年のハロウィーンの騒動は規制をかけないことへの非難が多く寄せられたことも事実だろう。これらを受けた渋谷区は2019年6月19日、ハロウィーン路上飲酒規制条例（正式名称：渋谷駅周辺地域の安全で安心な環境の確保に関する条例）を定め、翌日から施行された。松井剛編『ジャパニーズハロウィン』(2019)では路上飲酒禁止条例と表現している。マスコミでの表現をまとめておきたい。影響力と言う観点からネット上のものを紹介しておきたい。

東京都渋谷区、路上飲酒禁止条例　ハロウィーン対策で　2019/6/19 17:44　日本経済新聞
※条例の正式名称の記述はない
https://www.nikkei.com/article/DGXMZO46302140Z10C19A6CC1000/

渋谷ハロウィーンで路上飲酒禁止条例が成立　20日に施行　2019.6.19 21:08 社会事件・疑惑　産経新聞
※条例の正式名称の記述はない
https://www.sankei.com/affairs/news/190619/afr1906190091-n1.html

渋谷区／ハロウィンで「飲酒禁止」要請、ドンキ酒類販売自粛
行政／2019年10月21日　流通ニュース
※条例の正式名称の記述あり
https://www.ryutsuu.biz/government/l102142.html

ハロウィーンの“聖地”渋谷は今年から飲酒禁止に…「公共の場所」の基準を渋谷区に聞いた　2019年10月24日 木曜 午後7:00　プライムオンライン編集部
※条例の正式名称の記述あり
https://www.fnn.jp/articles/-/13376

条例が制定された際にはハロウィーンを強く意識し、インパクトのある表現を求めたため「ハロウィーン路上飲酒規制条例」に類似したものが散見された。しかし、この「渋谷駅周辺地域の安全で安心な環境の確保に関する条例」については罰則はない。ここにもまた、「容認と規制」の問題が生じている。海外では「罪と罰」の関係から法律で規制することができるが、日本は文化的に処罰型の文化ではなく、許し型の文化である。これは教育の在り方とも大いに関係している。処罰されるからそうした行動はしないのではなく、人に

迷惑をかけるような行動はしないという方向性に導いているのだ。日本はこれまでこうした「許し型」文化を背景に「容認と規制」のバランスを取りながら、処罰のない規制で乗り越えてきた。COVID-19 により日本で初めて緊急事態宣言が発せられたが、他国のロック・ダウンとは異なり罰則のない、要請、強い要請として実行された。欧米各国からはその効果について疑問が投げ掛けられたが、ほとんどの国民がこれに従い、暴動や大きな混乱も起きることなく、一定の成果を収めた。まさに文化の違いである。

「渋谷駅周辺地域の安全で安心な環境の確保に関する条例」の適用範囲はハロウィーンに限られたものではない。

（公共の場所における飲酒の制限）
第6条 来街者は、次の各号に掲げる期間において、渋谷駅周辺地域のうち、区規則で定める区域内の公共の場所（道路、公園、広場その他公共性を有する場所をいう。以下同じ。）で飲酒をしてはならない。
（1）10月31日及び11月1日並びに10月24日から同月30日までの金曜日、土曜日及び日曜日
（2）12月31日及び1月1日
（3）前2号に掲げる期間のほか、区長が特に必要と認める期間
2 区長は、前項の規定による飲酒の制限について、時間帯を限って行うことができる。

渋谷区は「渋谷駅周辺地域の安全で安心な環境の確保に関する条例」（更新日：令和元年10月18日）を発表し、以下の3つのデータをPDFで貼り付けている。

渋谷駅周辺地域の安全で安心な環境の確保に関する条例（PDF 174KB）
渋谷駅周辺地域の安全で安心な環境の確保に関する条例施行規則（PDF 107KB）
公共の場所における飲酒制限の区域(TIF 7,012KB)

筆者の率直の印象として、渋谷区は周囲からやり過ぎた規制をせず、地元からの要請には答えたという形式を取ったが、罰則がないことから決定的な対策にはなっていないことは明らかだ。また、条例を定めた以上、これを常に実行しなければならないということだ。これには渋谷区がどの程度周知に力を入れるのかも大きな問題である。なぜなら、渋谷ハロウィーンに集まるのが、ほとんど渋谷区外の人だからである。どんな規制がかかっているかを十分な下調べをして渋谷ハロウィーンに参加する人は果てしてどのくらいいるのだろうか。罰則があれば、大きな抑止力は発揮されるが、もともと荒れた行動をする人がごく限れた一部の人である以上、その一部の人に荒れた行動を起こさせないための規制だとすれば、罰則がないことは軽くみられる可能は高い。

一方で、2018年の荒れたハロウィーンについてマスコミでも大きく取り上げ、その後も事があれば、軽トラ横転の事件については報道されることになり、「渋谷は怖い」というこ

とが渋谷に集まって来る若者へのある程度の抑止力にはなるかもしれない。

ハロウィーンは外来の祝祭儀礼であるが、その宗教的な意味合いは、大量生産・大量流通・大量消費の中で消えて行った。しかし、これは現代の儀礼文化と同様にキーワードが「持続」ではなく「変容」であることだ。(41) ハロウィーンはヨーロッパからアメリカに伝えられると、子供を中心にした消費文化を背景にしたイベントへ変容した。しかし、これが日本に伝えられると、当初、百貨店などを中心にアメリカと同様の動きをしたものの、若者が選択したのは仮装をして楽しむ方向性であった。それも TDL や USJ のような限定された場所ではなく、最も若者が集まる渋谷がそのシンボルとなった。宗教的な意味を失いながら、祝祭の持つ「人が集まる」という最も重要な部分だけが生かされ、「見る＝見られる」、自然発生的な参加型イベントのハロウィーンへと発展したのが渋谷の姿である。そこには若者の現実へのストレスの発散の場、普段はコスプレをしない人が、この日限定で思い切ってコスプレした非日常の世界が展開されている。店舗・企業等が思い描いた消費行動ではなく、クリスマスとは全く異なる行動が容認された若者の姿がハロウィーンで表現されたのではないだろうか。

7　波及する渋谷化現象

ハロウィーンになるとマスコミが「今年の渋谷ハロウィーンは」という報道がここ数年必ずある。そこではスクランブル交差点、センター街の過去の映像が流され、2018 年の軽トラ横転のがその象徴となっている。

では他の地域はどうであろうか。この時頭をよぎるのはプロ野球で優勝が決まった時の様子である。大阪なら道頓堀川にかかる戎橋付近だろうか。グリコの巨大なネオンサイン、かに道楽の看板などが印象的だ。この近辺には大丸心斎橋店、H&M、ディズニストアーやサンリオギャラリー、PABLO などが狭い地域に密集している。インターネット上の記事、畑中章宏「関東人が知らない『大阪ハロウィン』ー渋谷とはココが決定的に違う」（2017 年 10 月 31 日）では次のような指摘がある。

> ハロウィンのコスプレをした若者たちは、次から次に記念写真を求めてくる外国人観光客に応じて、グリコサインを背景にポーズをとる。ハロウィン・コスプレーヤーに取材したところ、一緒に写真を撮ろうと声を掛けてくるのは、9 割から 6 割合で外国人だという。
>
> そのほかに大阪ハロウィンの特徴らしいのは、仮装者がそれほど回遊しない点である。なかには戎橋から御堂筋を渡ったところにある「アメリカ村」に移動すると答えたコスプレーヤーも何組かいた。
>
> 東京渋谷のハロウィンは、大小の通りが交差し、明るい道から暗い薄暗い路地へと、ゆるやかな起伏をそぞろ歩くことが、特徴であり魅力とみられた。こうした遊動性は大阪のハロウィンには少ないのである。(42)

渋谷センター街の遊動性は原宿の竹下通りと同じ光景だ。ハロウィーンの時期だけでなく、ショッピングなどに来る若者はそもそも遊動性、あるいは回遊魚のように同じエリヤを回遊することに特徴がある。

また、どのくらいの影響があるかはわからないが、東京にはTDL、大阪にはUSJとまさに東西を代表するテーマパークがあるが、TDLのハロウィーンはディズニー関係でしか大人は仮装できないが、USJにはこの制限はない。

事前の調査でも、大阪でハロウィンが最も盛り上がる場所は、「繁華街とちごて、USJちゃうんか」という答えを何人もから得ていた。
「ユニバーサル・スタジオ・ジャパン（USJ）」で開業翌年の2002年（平成14）以来、毎年開催されているハロウィン・イベントはたしかに、日本を代表するハロウィン会場であるらしい。
USJのハロウィン・イベントが誇れる最大の理由は、東日本を代表するテーマパークである東京ディズニーランドがハロウィンの時期でも、ディズニー・キャラクター以外の仮装を認めていないのに対し、コスプレを幅広く許可している点にある。(43)

朝日新聞DIGITALの伊藤恵里奈・鶴信吾「ハロウィーン仮装、大阪は「鬼滅」目立つ　渋谷は激減」（2020年10月31日）では次のような記事が掲載されている。

「ハロウィーン目的で渋谷に来ないで」と区長が呼びかけた東京都渋谷区。午後7時すぎから、渋谷駅前は混雑したが、仮装姿はまばらだった。妖怪の格好で友人と訪れた埼玉県の女子高校生（16）は「コロナについてはあんまり考えなかった。ハロウィーンだし、コスプレしたかった」と語った。
渋谷駅前のスクランブル交差点付近には警察車両が並び、警察官が「車道に出ないでください」などと呼びかけ、民間警備員も道行く人に立ち止まらないよう促していた。警戒にあたっていた区職員は「仮装をしている人は昨年の数%程度では」と語った。
一方、大阪・道頓堀は午後7時を過ぎると、仮装した人や見物人でごった返した。人気漫画「鬼滅の刃」のキャラクターに扮した人が目立ち、互いに写真を撮り合っていた。仮装した人たちで混雑した名古屋市の中心部では、一部で入場が規制される場面もあった。
「マスクを着けた仮装など、コロナ時代のコスプレを楽しんでほしい」と呼びかけた福岡市では、繁華街・天神の公園に仮装した多くの人が集まり、夜には移動が難しいほどの人だかりに。大声で歌ったり叫んだりする人もいた。(44)

テレビ西日本「『注目を浴びたかった』　ハロウィーンで全裸に　男を逮捕　福岡市の公園」（2020年11月1日）では次のような報道があった。

ハロウィーンの10月31日夜、福岡市天神の公園には仮装した若者が多く集まり、注目

されようと全裸になった20歳の男など、２人が逮捕されました。
福岡県古賀市の自称・会社員の男（20）は10月31日午後9時15分ごろ、福岡市天神の警固公園で、全裸になった疑いがもたれています。警戒中の警察官が、公然わいせつの現行犯で逮捕しました。
調べに対し男は「ハロウィーンで、たくさん人が来ていたので、注目を浴びたかった」などと話しているということです。(45)

「一時入場制限も　ハロウィーンで今年も仮装した多くの若者らが集まる　名古屋・栄のオアシス21」（2020年10月31日）でも次のような記事が掲載されている。

ハロウィーン当日となった31日、名古屋・栄のオアシス21には仮装した若者らが集まり、施設が入場を制限するなどの対応をとりました。
毎年、オアシス21の「銀河の広場」には、ハロウィーン当日多くの人が集まり混雑します。
迷惑行為が多く発生するため、オアシス21では今年、通常の約10倍となる55人の警備員を配置するとともに、多くの店舗が午後6時に閉店する対応をとりました。
今年も、日が暮れるとともに、仮装した多くの若者らが集まり始め、オアシス21では、密集や危険を避けるために設定した混雑の基準を超えると判断し、午後7時すぎに、出入り口で警備員らが入場を制限しました。
また、警察にも協力を要請し、警察官が、通行を整理するなどの対応に当たりました。(46)

2020年のハロウィーンはこれまでと違った傾向がある。何といってもCOVID-19の影響である。これにより２つの方向性に分かれたと言ってよいだろう。
第１に自粛、あるいはおうちハロウィーンのようにハロウィーンは楽しむにしろ若干控え目になったという側面である。そもそも街に繰り出さない、できるだけ家にいるという傾向。中にはバーチャルハロウィーン、オンラインハロウィーン、リモートハロウィーンが実施されたところもある。
また、街に出かけるにしろ、コスプレはしないで夜の街を回遊した行動パターンである。これにはコロナ禍の中であまりはしゃぐことに罪悪があること、あるいは周囲の目が気になるという傾向だ。コスプレの衣装は持っては来ても実際には着ないなどの周囲との同調を重視した行動パターンだ。
第２はコロナ禍での自粛生活に疲れ、ここではしゃぎたいという若者の行動である。若者の意識には政府がGO TOトラベル、GO TOイート、GO TOイベントなど経済活動を優先する政策をとっていることが拍車をかけていると考えられる。4月の緊急事態宣言下でも営業を続けるパチンコ店、その店に人が殺到している様子を見るとハロウィーンに群がる若者を一概に非難することはできない。もちろん、迷惑行為や犯罪行為は許されるべきではないことは言うまでもないことだ。もはやハロウィーン騒動は渋谷だけの問題ではない。

主催者なしのなんとはなしに集まる若者のハロウィーンは全国に波及していると言ってよいだろう。

エピローグ

日本のハロウィーンは戦後のモロゾフ、キディランドのハロウィンパレード、東京ディズニーランド、カワサキハロウィン、ユニバーサル・スタジオ・ジャパンなどのイベントにより着実に定着した。もとを辿れば日本のハロウィーンはビジネスを目的にしたもので、夏休みからクリスマス商戦までの間の購買力を確保するために意図的にお菓子メーカー、バラエティグッズ店がこぞってハロウィーン商戦に参加し、テーマパーク等は新しく人気のイベントとして導入したものだ。つまり、日本のハロウィーンはビジネス目的で導入され、それは見事に根付き、今やクリスマス、バレンタイン・デーと並ぶ三大イベントにまで成長した。

渋谷という街がTOKYU109の登場と共に若者のファッションの象徴となるなど、渋谷は若者を惹きつけ、またその若者によって潤ってきたのではないだろうか。こうした若者の多くが渋谷区以外から集まって来ては、消費者として渋谷にお金を落としていくことなる。渋谷センター商店街から若者の姿が消えれば、たちまちシャッター商店街になるかもしれない。大人がビジネスとして導入したハロウィーンというイベントは若者の自由な発想と想像を越えた行動力によって、変態仮装行列となり、さらに軽トラ横転という事態を引きおこすまでに暴動化した。本稿は「荒れる若者」としたが、「荒れる若者」が突如として現れたわけではない。これまでは主催者ではないから規制をかけないという態度を取り続けていた渋谷区もようやく重い腰を上げた。2019年のハロウィーンに向けての動きを簡単に紹介しておきたい。

2月27日　第1回渋谷ハロウィン対策検討会開催
5月15日　中間報告公表
6月19日　「渋谷駅周辺地域の安全で安心な環境の確保に関する条例」が成立
9月25日　ハロウィン対策費1億292万円を補正予算に計上、可決
10月 7日　コンビニやMEGAドン・キホーテなど41店舗に対して、アルコール類の販売自粛要請を正式に開始
10月19日　センター街において「SHIBUYA PRIDE SHIBUYA HALLOWEEN」と書かれたマナー啓発広告の設置開始

「渋谷駅周辺地域の安全で安心な環境の確保に関する条例」について区外の来訪者に制限をかける地域や時間帯をどう周知していくのか、罰則がなく、「指導」と称してどこまでできるのかはむしろこれからが試されることになる。

「容認」すればそれは学習体験となり、同じことを繰り返し、さらに若者はもう一歩踏み込んでいくことだろう。多くの若者がこれまで同様「人に迷惑をかけない」行動をとるだ

ろうが、COVID-19 に対する緊急事態宣言を見ても、もはやこの考え方に頼るには限界があるのではないだろうか。それは若者だけではない。緊急事態宣言下でも生活のために営業する夜の街のホストクラブをはじめ、パチンコ屋、そこを利用する人達、行列を作る人達の姿を見る時、ハロウィーンに集まって来る若者とあまり大きな違いはないのではないかとも思える。

渋谷ハロウィーンの荒れる若者の姿は現代日本のまさに縮図とも言える。バレンタイン・デーになると、加熱するため学校にチョコレートを持って来て、渡すことを禁止してるところもあるという。ネット上でも小中高校の生徒がおそらく投稿し、それが記事やニュースになっている。(47)(48)(49) この類のものはいくらでも探すことができる。会社ではいわゆる義理チョコ問題が発生している。日本ではチョコレートの売り上げるためにモロゾフが始めた習慣だ。つまりビジネスとして新しい販売商戦として繰り出したものだ。大人がビジネスと持ち込んだ習慣が知らない間に子どもや若者に定着し、その付けを払うのは行政や学校現場と言うことになっているのが現状だ。子どもや若者をターゲットにした戦略は見事に、いや想像を越えて定着し、コントロールが難しい状態にまで成長した。2024 年度の新しい 1 万札の顔になる渋沢栄一（1840-1931）が『論語と算盤』(1916) 中で「道徳経済合一説」を唱えたが、最近では CSR(Corporate Social Responsibility)が問われるようになった時代だ。

ハロウィーンを推し進めた企業にハロウィーン騒動の CSR を求めるわけにはいかないが、若者には自制を求めなければならい。しかし、楽しさや楽しみ方を若者に与え、教えた社会は若者を「変態仮装行列」と揶揄し、ようやく条例を定め規制に乗り出したが、ゾンビのように意志のないこの群衆をどう導いてくのだろうか。「容認」から「規制」への舵取りは一過性のものではなく、継続的に行うことが必要だ。

引証資料

(1) Morton, Lisa. *The Halloween Encyclopedia* (McFarland, 2003), p.90.

(2) 本田錦一郎『ヨーロッパの文化・文芸とケルト』(―学問を野に放つ試み―)(松柏社、2004 年 6 月)、p.7.

(3) Morton, Lisa. *The Halloween Encyclopedia*、p.90.

(4) Morton, Lisa. *trick or treat: a history of Halloween* (Reakion Books, 2017), p.14.

(5) 藤高邦宏「英米文化の背景　英米人の迷信俗信考（17）Ⅳ　年中行事―その 6　初穂祭・収穫感謝祭・万聖節の前夜祭・火薬陰謀事件記念日・アメリカの感謝祭」(『倉敷芸術科学大学紀要』第 14 号、学校法人加計学園倉敷芸術科学大学、2009 年 3 月)、pp.171-172.

(6) Brannatyne, Lesley Pratt. *Halloween: An American Holiday, an American History*, p.67.

(7) 「イギリスで人気なのはハロウィンじゃなく『ガイ・フォークス・ナイト』どんなお祭りか知ってる？」https://edmm.jp/65/（2020 年 7 月 1 日アクセス）

(8) Marton, Lisa. *trick or treat: a history of halloween*, p.88.

(9) Rogers, Nicholas. *Halloween: From Pagan Ritual to Party Night* (Oxford University Press, 2002), p.43.

(10) 関口英里「エンターテイメントとしての祝祭空間—ハロウィン分析を通して見るアメリカ社会—」(『同志社女子大学学術研究年報』、第 54 巻第 1 号、同志社女子大学、2003 年 12 月)、pp.136-137.

(11) Neal, Brandi. "What Is Devil's Night? The History Of The Night Before Halloween Goes A Long Way Back" (Oct. 29, 2017)
https://www.bustle.com/p/what-is-devils-night-the-history-of-the-night-before-halloween-goes-a-long-way-back-2966246 (2020 年 5 月 3 日アクセ

(12) Marton, Lisa. *trick or treat: a history of halloween*, p.88.

(13) Meyers, Robert J. *Celebrations: The Complete Book of American Holidays* (Doubleday & Company, 1972),p.261.

(14) Sanito, Jack. *New Old-Fashioned Ways: Holidays and Popular Culture* (The University of Tennessee Press/Knoxville, 1996), pp.82-83.

(15) Sanito, Jack. *All Around the Year: Holidays and Celebrations in American Life* (University of Illinois Press, 1995), pp.165-166.

(16) 田村哲『外遊九年』(目黒書店、1908 年 11 月)、p.34.
(http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/761032) (2019 年 11 月 18 日アクセス)

(17) 佐々木隆「日本のハロウィン今昔物語：明治時代に紹介されたハロウィン」(『ポップカルチャー・若者文化研究』(第 1 号、2019 年 2 月)、p.9.

(18) Morton, Lisa. *trick or treat: a history of Halloween,* pp.78-79.

(19) ショーン・ホリー／川村雅也他訳『アメリカ・ポップカルチャー事典』(北星堂書店、1997 年 6 月)、p.205.

(20) Morton, Lisa. *trick or treat: a history of Halloween,* pp.88-89.

(21) 佐々木隆「日本ハロウィン受容小史」(『武蔵野学院大学日本総合研究所研究紀要』第 17 輯、武蔵野学院大学日本総合研究所、2020 年 3 月)、p.134.

(22)「人口統計学辞書」https://www.weblio.jp/content/若者(2020 年 7 月 4 日アクセス)

(23)「若年者雇用対策」
https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/koyou_roudou/koyou/jakunen/index.html (2020 年 7 月 4 日アクセス)

(24)「国際連合広報センター」
https://www.unic.or.jp/activities/economic_social_development/social_development/integration/youth/(2020 年 7 月 4 日アクセス)

(25)『令和元年版　子供・若者白書』
https://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/r01honpen/pdf/b1_00toku1_01.pdf
(2020 年 7 月 4 日アクセス)、p.2.

(26) 佐々木隆『オタク文化とポップカルチャの微妙な関係　増補追加版』(武蔵野学院大学

佐々木隆研究室、2020 年 4 月)。pp.2356-2357.
(27) 大久保衣純「日本のハロウィーン受容—カワサキハロハロウィン 2014 の実態調査から」(『國學院雑誌』、第 116 巻第 11 号、國學院大学、2015 年 11 月)、p.2.
(28) "KAWAHALLO HISTORY" (http://lacittadella.co.jp/halloween2016_history/)(2019 年 5 月 3 日アクセス)
(29) 長沢利明「現代の年中行事」(民俗学事典編集委員会編『民俗学事典』丸 善、2014 年 12 月)、p.425.
(30) 『朝日新聞』朝刊 (1987 年 10 月 28 日)、第 19 面。
(31)「渋谷のハロウィンとスクランブル交差点」(『むらおさ』第 30 号、2019 年 7 月)、p.15-16.
(32) 「大人は眉をひそめる『ハロウィン』バカ騒ぎをどうしてくれよう!」(『週刊新潮』第 60 巻第 42 号、新潮社、2015 年 10 月)、p.138.
(33) 近藤倫子「米英仏のアルコール対策—飲酒に関する法規性と健康対策」(『調査と情報』第 831 号、国立国会図書館、2014 年 9 月)、pp.1-12.
https://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo_8748100_po_0831.pdf?contentNo=1&alternativeNo= (2020 年 7 月 8 日アクセス)
(34) Satran, Joe. "The Secret History Of The War On Public Drinking"
https://www.huffpost.com/entry/public-drinking-laws_n_4312523
(2020 年 7 月 8 日アクセス)
(35) 松井剛編『ジャパニーズハロウィン—若者はなぜ渋谷だけで馬鹿騒ぎするのか?』(星雲社、2019 年 9 月)、p.49.
(36) 「主催者なし、ステージのような魔力 渋谷ハロウィーン マナー守って」(『東京新聞』2018 年 10 月 31 日朝刊第 22 面) へのコメント
(37) Ditto.
(38) 林猛「成人式の変容とその展望—時代の変革を受けて」(『日欧比較文化研究』第 5 号、日欧比較文化研究、2006 年 4 月)、pp.53-58.
(39) 佐々木隆「渋谷のハロウィンとスクランブル交差点」(『むらおさ』第 30 号、2019 年 7 月)、pp.8—20.／佐々木隆「渋谷ハロウィンから見えるもの」(『日欧比較文化研究』第 23 号、2019 年 10 月)、pp.51-68.
(40) 佐々木隆「渋谷ハロウィンから見えるもの」、p.53.
(41) 石井研士『日本人の一年と一生 変わりゆく日本人の心性』(春秋社、2005 年 2 月)、p.ii.
(42) 畑中章宏「関東人が知らない『大阪ハロウィン』ー渋谷とはココが決定的に違う」(2017 年 10 月 31 日) (https://gendai.ismedia.jp/articles/- /53370?page=2)(2020 年 11 月 3 日アクセス)
(43) Ditto.
(44) 伊藤恵里奈・鶴信吾「ハロウィーン仮装、大阪は「鬼滅」目立つ 渋谷は激減」(2020 年 10 月 31 日) (https://news.yahoo.co.jp/articles/c68d8a2e65078019cbf3436dc75df9138aed3369)(2020 年 11 月 3 日アクセス)

(45) テレビ西日本「『注目を浴びたかった』 ハロウィーンで全裸に　男を逮捕　福岡市の公園」(2020年11月1日)(https://news.yahoo.co.jp/articles/3ef82e7629d4d2a0ed790554aa033113f4b98da6)(2020年11月3日アクセス)
(46) 「一時入場制限も　ハロウィーンで今年も仮装した多くの若者らが集まる　名古屋・栄のオアシス21」(2020年10月31日)(https://www.nagoyatv.com/news/?id=003391)(2020年11月3日アクセス)
(47) 「学校でバレンタインチョコ受け渡し禁止ルール。破ったらどうな…」(2017年1月28日 18:00｜ウーマンエキサイト)
(https://woman.excite.co.jp/article/lifestyle/rid_E1485397246201/pid_2.html)
(2020年7月9日アクセス)
(48)「バレンタインが禁止の学校が増えているとは一体？」(2016-01-27)
(http://dokujino.hatenablog.com/entry/2016/01/27/011223)(2020年7月9日アクセス)
(49)「学校にバレンタインチョコは持って行けない？」(http://education.mag2.com/otaku/bn157. html)(2020年7月9日アクセス)

キーワード：ハロウィーン、ガイ・フォーク・ディ、若者、容認、規制

アーカイブ

第1号（2020年2月発行）

佐々木　隆	日本のハロウィン今昔物語：明治時代に紹介されたハロウィン
Takashi Sasaki	The Present and the Past of Halloween in Japan: Halloween introduced in the Meiji Era
朱　雨濃	中華要素のある日本アニメの一考察：1960年代～1990年代まで
Zhu YuNong	A Study of Chinese Factors in Japanese Anime: From 1960s to 1990s

第2号（2020年12月発行）

佐々木　隆	文献から見る日本のハロウィーン受容史—大正・昭和戦前—
Takashi Sasaki	A Bibliographical History of Halloween in Japan: The Taisho and the Pre-war Showa

第3号（2021年1月発行）

佐々木　隆	文献から見る日本のハロウィーン受容史—昭和戦後（1980年前半まで）—
Takashi Sasaki	A Bibliographical History of Halloween in Japan: The After-war Showa (Until the former 1980s